

# 魔女の孫の手

2008.12.05

彼女は、ちょっと風変わりだった。

仕事ぶりは とても評価できるものだったし、  
所長が 彼女を信頼しているのは、とてもよく わかっている。

都内随一の激戦区でありながら、常に 売り上げナンバー1を誇る  
この営業所は、異動による社員の入れ替わりが激しく、  
所内では 彼女が 実は 一番の古株でもある。

見かけが どうこう、というのではない。

彼女は どこから どう見ても、ごく普通のOL・・・  
いや、もう少し若ければ、所内のオトコどもが 放っておかないだろう、  
というくらいの 絶妙な雰囲気をもった 美人OLだった。

いったい、彼女の、どこが ちょっと変わっているのかと言うと。

まず、彼女は、『孫の手』を いつも 事務機の脇に 引っ掛けていた。  
それも、ガラス製の孫の手だ。

経理を一手に引き受けている彼女は、  
銀行へ行く以外は めったに 席を外すことはなかった。

それが関係あるのかないのかは わからないけれど。

たまに、うううーっと言いたげな表情で 肩を回しはじめると、  
おもむろに 机の脇に掛けてある『孫の手』を手に取り、  
あろうことか 背中に突っ込み、気持ちよさそうに 背中を搔くのだった。

最初に その場面を 目撃したとき、僕は 目を疑った。

あんな美人が、なぜ！？

だが、彼女のそんなところを 気にかけているのは、僕ひとりのようで。

営業マンや顧客が 常に 出たり入ったりしている この営業所の片隅で、  
彼女は 誰にも とがめられることなく、ガラスの孫の手とともに  
一日を過ごすのだった。

ある日のこと。

僕は さらに 彼女の奇妙な面を、見てしまった。

僕が 朝の得意先回りを終え、  
連休の谷間で 珍しく がらんとした営業所に戻ると、  
彼女が 机に 突っ伏していた。

ど、どうしたんですか！？

大丈夫ですか！！??

具合が悪いのではないかと 思った僕が 駆け寄ると、  
彼女は、ゆっくり上半身を起こし、大きく、伸びをした。

それは まるで、猫が 背中を伸ばしているような絵だった。

ん、ん————。

もう お昼休み、終わったの？

彼女は ぼんやりとした目で、僕を見つめた。

なぜか どきとした僕は、  
慌てて 時計を見るふりをして、彼女から 目をそらした。

なるほど。

いまは、昼休みの時間だ。

営業マンである僕には、あまり、  
昼休みという時間のくくり方の感覚がない。

うっかりしていた。

そんな僕の考えを見透かすかのように、  
彼女は にっこり笑って、小声で つけたした。

魔女はね、疲れやすいのよ。

はあ？

僕は、すっとなきょうな声をあげたかもしれない。

そんな僕に くるっと背中を向けると、  
彼女は いつものように、左手で電卓を打ちながら、  
書類に なにやら 書き込みを始めた。

もう 僕の相手をする気は ないらしい。

やっぱり、彼女は 風変わりなひとだった。

それから 数週間後のこと。

所内のトラブルメーカーとして有名な同僚のNが、  
今度は とんでもない事態を 引き起こした。

怒り狂った客が、ナイフを片手に 営業所へ 乗りこんできた、  
というのだ。

営業先で 同僚からの電話を受けた僕は、  
すぐさま 営業所へ 戻った。

警察へは 連絡したのだろうか？

いや、そんなことをすれば、今後 どうなるか わかったもんじゃない。

Nのやつ、いったい なにを やらかしてくれたんだ！？

タクシーから 転げ落ちるように降りた僕の目には、外から見る限り、この小さな営業所は、ひっそりと 静まり返っているように見えた。

落ち着け、  
落ち着くんだ。

中で なにが繰り広げられているかわからないため、  
ドアを そっと、そっと 細く開け、中を覗きこむと・・・

中では、所長をはじめ、男性社員全員が、床に倒れていた。

そして、この地域でも クレーマーと名高いE氏が、ナイフを持ち、  
刃先を、こともあろうに あの彼女へ向けていた。

ゆっくりと ゆっくりと、Eは 彼女との間の距離を 詰めていく。

## 危ないっ

僕がドアを開けて 室内に飛び込んだのと、  
彼女が ガラスの孫の手を Eに向かって まっすぐに振り下ろしたのが  
同時だった。

振り下ろしたとはいえ、彼女と Eとの間は、まだ距離がある。  
孫の手が届く範囲では、なかった。

孫の手で、なにをしようっていうんだ？  
彼を怒らせるだけじゃないか！！

踏み出した僕が、そこで 見たものは・・・

孫の手が、体に触れてもいなければ、かすってもいないはずなのに。

E氏は、まるで 誰かにパンチを食らったかのような格好で  
後ろに 数メートル 吹っ飛んだ。

そして、壁にアタマを打ちつけ、失神した。

呆然とする僕に気づいた 彼女は、ぺろっと 舌を出してみせた。

見た…のね!?

僕は、こくり、と うなづいた。

ほんとに。

魔女だったんですね？

僕の声は、かすれていた。

あら、ものわかりがいいわね。

じゃ、あとは 頼んだわよ。

彼女は、にっこり微笑むと、ガラスの孫の手で、  
まずは E氏を 指して くるくると なにやら 円を描いた。

続いて 営業所内全体に向かって、大きく孫の手を 振り回し、  
今度は 無限大のマークを描くような しぐさを した。

そして、宙を見つめると 満足げに 頷いて、  
そっと 孫の手を 机の脇の いつものフックに戻し…

僕に、チャリン☆と 音がするようなウインクを投げかけて、  
軽い足取りで 部屋を出て行った。

ま、待ってくださいっ

僕は、彼女の後を追って、部屋を出た。

あ、あの…

すぐに 追いついたものの、  
なにを話せばいいのか、わからなかった。

あ、あの…

『孫の手』は、あなたの魔法の杖なんでしょう？  
置いて行ってしまってもいいんですか？

僕の マヌケな問いに、彼女は、嘔きだした。

なに 言ってるのよ。  
私、明日も ちゃんと 出社するわよ？

その瞬間、僕の脳内に ひらめいたことが あった。

そういえば…

彼女が 背中を搔くのは、決まって、  
口うるさい客が来たときや、所長が 妙にイラついているときなど、  
営業所内の空気が 乱れたときだった。

彼女は、孫の手で 背中を搔くふりをして…

そうだったんだ…！

僕は、彼女を逃がすまいと、必死で 言葉をつないだ。

えっと……。

ココは、あなたの孫の手のおかげで、いいんでしょうけど……

あなたは、ふだん、孫の手がないと、困るんじゃないの？

僕は なぜか、急に 年上の彼女に向かって、友達言葉になっていた。  
秘密を共有したという意識が、今頃になって 出てきたのだろうか？

彼女は、首を右に傾けると、大きな目で じっと 僕を見つめたまま、  
左手の白い指で 胸元から ネックレスのヘッドを 引っ張り出し、  
ぶらぶらと スイングさせた。

一見、なんの変哲もない、ごく普通の ネックレス。

こういうのには 詳しくない 僕には よくわからないけれど、  
天然石と呼ばれている 石ころが いくつか  
結びあわさされていて、  
先っぽには 銀色の十字架が ぶら下がっている。

キラキラと輝く その十字架は、  
いかにも 不思議なチカラを秘めていそうに 見えた。

そっか。

これが、イザというときには、魔法の杖の代わりになるんだ。。。

ポーンと 立ち尽くす僕に向かって ニッと笑い、  
ぐるり と背を向けて、片手を ひらひらと振りながら去っていく、魔女。



その うしろ姿を見送り、はっと 気づいた僕が 部屋へ戻ると、  
そこあったのは 見慣れた ごく普通の風景だった。

室内は、なにごともしなかったように いつもの活気にあふれかえっている。  
誰ひとり、床に倒れている者なんて、いない。

そして、さきほど 気を失うほど 頭を強く打ったはずのE氏は、  
応接セットで、上機嫌で  
Nの差し出すカタログを のぞきこんでいた。

チャリン☆

と、彼女のウィンクのような音が かすかに 聞こえたような気がした。

彼女の事務機の脇に ぶら下がっている ガラスの『孫の手』が、  
いつになく、ゆらゆらと揺れているのに 気づいたのは…

たぶん、僕だけだろう。